4．近江における弥生時代後期後葉の土器群――その再検討――

(1) 問題の所在

従来，近江における弥生土器研究は個別の土器を他地域の個々の土器と比較する方法で，他地域の編年の中で語ってきた。しかし型式・形式等の概念の濫用や一括資料のもつ性格の理解不足等から，他地域―特に畿内の土器群との並行関係において誤認も見うけられる。

ここでは近江の弥生時代後期から古墳時代直前までの土器群を4期（当分の間は4型式といっても許されるかもしれない）に分けて略述する中で，他地域との並行関係について触れ，土器に表れた近江の中での地域性についての予察を行う。

ただ紙数の関係上，編年表を1葉示し（第15図），要点のみを述べることとし，詳しくは用意している別稿にて扱うことにする。

弥生時代後期後葉という概念は後述するように漸定的なものであるが，にもかかわらずこの時期の土器を取り上げたのは，昭和59年度に調査した本報告の大辰巳遺跡やすぐ隣のほ場整備事業に伴う永久寺遺跡[(2)]の出土遺物の主体をなすことが主たる理由である。更に近江ではそれ以前に比べ良好な資料は少いが出土相対量が多いこと等もそれに加わる。またそこで得られた結果が，古墳の出現あるいは創出についての理解を助けるであろうという見通しがあったにほかならない。

(2) 近江の弥生時代後期後葉の土器

(a) 時間的位置

弥生時代の後期の土器について定見を持ち得ないため，ここでは唐古遺跡第五様式第二亜式までを含めた唐古遺跡第五様式並行期[(3)]を弥生時代後期としておく。

またここで後期後葉とする時期は，ほぼ唐古遺跡第五様式第一亜式並行期からいわゆる庄内式並行期[(4)]の直前までのことで，土器群の変化を説明するための便宜的なものにすぎない。あえて近江の弥生時代後期のこのころの土器群中に画期を求めようとすると，本書で言う1期と2期の間に求められ，それ以降が後期前葉・中葉・後葉と土器型式群をつらぬく諸要素のまとまりによって分ける際の後期後葉と呼称しうるものである。

後期中葉と後葉を分ける要素とは，畿内地方第V様式前半[(5)]を中心とし代表される，口縁が外反していく高杯（高杯形土器A_2[(6)]）が消失しつつあり，東海西部地方を中心と

する「欠山式」形高杯[7]が出現してくること，やや小形化していく器台とその口縁の装飾化，あるいは垂下，受口状口縁甕端部のつまみ出し傾向の出現等に求められる。

以下，便宜上漸定的な後期後葉を中心とした土器群を略述するにあたり，とり合えず1期～4期と仮称していくこととする。

(b)　1期

これまで受口状口縁と称してきた近江系甕形土器[8]については，基本的に口縁端部の外方向へのつまみ出しのないものが中心となり[9]，依然として口縁部外面に刺突文，肩部に沈線・刺突文を備え，胴部やや下位を突帯と櫛描波状文あるいは円弧文でこれを飾るものがある。

高坏は畿内地方と同様の口縁部が強く外反するものが中心となり，このころの後期の高坏の変化は比較的緩慢である。

器台は受部が直線的に伸びるものとゆるく外反するものが共存し，体部から裾部にかけてゆるく八字形に広がる。口縁部に装飾等はもたない（13・14）。

(c)　2期

近江系甕の口縁端は外方にややつまみ出す傾向のものと，つまみ出さないものが共存し，このことは「庄内式」並行期の直前まで続く。この期の新相で北陸の「月影式」といわれる甕に特徴的な「疑凹線」を備えた甕が小形のもので出現し加わる。これは胴部内面の頸部下端からヘラで削っているが，近江の後期での内面ヘラ削り[10]は北陸系以外の甕でも珍しいものではない。

高坏は前の期と同様の口縁が外反するものに，東海西部地方の「欠山式」に特徴的な高坏の古相のものが加わる。脚部が長く，坏部がさほど発達していない浅いものである(23)。これとは別にやや小形の碗状坏部をもつものも加わる(25)。

器台は直線的に伸びた受部から下はすぐに八字形に開くものに変わるが，口縁端を垂下あるいは肥厚し，浮文・刺突文・沈線文等の装飾を加えるものが主流となる。

先述の「欠山式」形の高坏も一部では器台の機能を果していた例があり，この時期以降，高坏と器台の機能未分化の傾向がはじまり，「庄内式」並行期まで続く。その結果，畿内と他地域で器種呼称の混乱も呼ぶようになる。

(d)　3期

いわゆる二重口縁壺が出現し，器台が小形のものになる傾向がでる。

浮文や沈線文で飾られた二重口縁の壺に加え，口縁がゆるく外反する甕の端部が上方に尖がり気味に処理され，いわゆる庄内式甕もある。近江系甕の口縁端のつまみ出しは，湖南においては顕著なものも見られるが，湖北地方ではむしろ口縁受部から頸部にかけてのカーブがゆるく肩の張らない北近江系とでも呼ぶべき甕が主流をなす[11]（37）。この種の甕は北陸系甕との相互の影響の中で成立してきたものである。[12]

更に北大津遺跡でこの時期顕著に現れる「甕Ｂ」(38)も，北陸・畿内と近江の３者相互の影響のもとで出現したもので，湖北南半・湖東では類例が少い。

湖北では「欠山式」形高坏の盛行期にあたり，坏部は深く発達し，口縁部内面に１条～数条の沈線文帯を備えたものに変化する。湖南でも「欠山式」形の高坏は盛行するが，加えて畿内の高坏形土器Ａ$_2$の発達した高坏が認められる。

器台の資料は不足するが，小形化傾向が顕著である。

(e)　４期

「庄内式」直前のこの時期は，近江系甕を残して畿内的な様相が顕著になる。近江系甕の口縁端部は２期に外方つまみ出しの傾向が現れ，この時期までつまみ出さないものと共存し，この間の口縁部の変化も少い。

「欠山式」形高坏の坏部は発達し，脚部は外湾しつつあるものになり，「元屋敷式」形高坏との中間的形態をなす。また近江での小形器台のこれまでの確実な初現はこの時期である。

この次の段階が「庄内式」並行期の最古相期にあたり，近江では「元屋敷式」形の高坏と甕，「月影式」形の甕等を伴う。

(f)　最古の土師器

「庄内式」は，近江では３型式ほどからなる土器群がこれに並行すると認識され，第15図には古相の一群を示した。

この時期の近江の土器―特に甕などは世の中で前方後円墳を作りはじめているころとは思えないような土器である。

(3)　近江での土器の地域性

(a)　近江系の甕・器台および高坏

1976年まで「受口状口縁」をもつ甕を東海系の「Ｓ字状口縁」甕として，ないしはその亜式として研究者は把えてきた。そして草津市片岡遺跡の報告[13]によって近江で出

土する「S字状口縁」甕は近江独自のものであり，「受口状口縁」甕と称すべきであるとされ，一部誤解と誤認を含みながら今日に至っている。

しかるに，すでに1960年，佐原真によりこの弥生時代後期の「受口状口縁」をもつ甕は近江独自の土器であり，加えて大辰巳遺跡で大量に出土した器台もこの地方独特の器形であることが明らかにされている。もっともこの近江独自のものとした甕は，後述する典型的な近江系甕とは異なるもの(14)であったが，この重要な指摘を今日まで全く生かされていないところに近江の弥生土器研究がいかに沈滞したものであったが如実にあらわれている。

「受口状口縁」をもつ甕が弥生時代後期に近江を中心に分布することは認められるところであるが，このころの山陽東部・山陰・北陸・東海などに特徴的な甕の口縁形態も受口状を呈しているため，本書では近江系甕と称してきた。近江系甕とは，口縁端に面をもつ受口状口縁外面に櫛状工具による刺突列点文を備え，胴部肩に櫛描沈線，櫛状工具による刺突列点文，胴部中ほどから下半にかけて櫛描円弧文と刻目の施された1条の突帯をもつ甕をその典型とし，脚台はもたないものである（5など)。

この典型的な近江系甕の分布の中心は湖南地方―現在の野洲郡・守山市・草津市付近の平野部に求められ，畿内地方―特に山城および大和・摂津などでも検出されている近江系甕はこの典型的な湖南地方の近江系甕である。なお湖北・湖西では，亜流近江系甕の分布地域となっており，湖北でもほぼ姉川以北にあたる湖北北半では第2章中で述べたように，亜流近江系甕よりさらに離れたものとなった北近江系とでも言うべき甕の分布地域となって，湖西の一部もそれに含まれる。

佐原真の指摘した近江系の器台とは，ほぼ唐古遺跡第五様式第一亜式並行期ごろ，あるいはその直前にあらわれるものを言い，ゆるく外反するか直線的な受部からゆるくハの字形に広がりながら裾部に至り，口縁に装飾をもたない中形品で3個の円孔を備えたものである（13・14など)。

またここで言う近江系の高坏とは，畿内地方や東海地方西部において後期中葉以降見られる口縁が外反するもので，畿内では高坏形土器A_2と呼ぶものと変らないが，上記の近江系器台とほぼ同時期に盛行しながらも，その後湖南地方の一部を除いて畿内的な変化は示さないものを指し，「欠山式」形高坏にとって変わられつつあるものである（10・11など)。

この近江系器台と近江的な高坏の変化は，湖北や湖西を中心に見られるものである。

(b) 他地域系の土器群

これまで遺跡ごとの他地域系と近江系土器との比率による分析は少し行なわれてき

た。しかるに北大津遺跡での甕Bの評価に表われているように必ずしも ── 系と言い切れない二地域以上の折衷的な土器もあり，そうした分析が成功しているとは言い難い。[15] 例えば，く字形に外反する口縁をもつ甕は畿内系として扱われる傾向にあるが，唐川遺跡II区T 6・7包含層出土資料のそれは全て北陸系の甕と同じ胎土であり，北近江系甕や東海地方からの搬入品とは明らかに異なるものである。また他地域系の形態を呈しながらも，確実に他地域からの搬入品と思われるものは思いのほか少いのである。

将来的には胎土の細かな分析と比較，出土資料全ての数的処理，更なる地域性の追求と規定等をふまえるべきであろうが，ここでは地域性を示す典型的な形式の分布とその大まかな頻度をもとに概観しておく。

近江系甕の中心は湖南地方であるにもかかわらず畿内的な様相も濃い。近江系の器台と高坏の変化は湖北を中心に湖西も含みうるが確実な東海地方からの搬入品も米原以北の湖北に多く，逆に東海地方西部に影響を与えた近江とはこの地域であると言える。また湖北でも姉川以北は湖西の一部を含んで北近江系甕の分布の中心となり，北陸的な様相が顕著である。湖西は北陸・畿内および湖北を通じてもたらされた東海の影響，それに近江系の四者が混在する形をとる。近江の中でも特異な様相を呈する地域の遺跡であることが認められる北大津遺跡は，湖西と呼ぶ地域の南端に位置するもので，甕B(38)とされたものは湖西の状況を如実に示す形式であろう。こうした折衷的な形式は近江のみならず各地にあり，例えば近江以外で出土した「近江系」あるいは「近江型」・「近江形」と報じられている土器の多くは近江系とは認められないものがある。

弥生時代後期における近江は，資料の少い湖東を留保しても，草津・守山・野洲を中心とした湖南(及び湖東？)，大津北半を含む湖西，湖北北半，湖北南半の4つの地域性が認められ，これらはそれぞれ近江以外の地域の影響は受けているが，他地域の土器分布圏に含まれるものとはみなし難く，搬入品の少なさがそれを補強するのである。

(用田)

註

(1) 田中琢の理解（「型式学の問題」『日本考古学を学ぶ』 1 1978年 12～23頁）が参考になり，筆者の考えに近い。

(2) 用田政晴・吉田秀則「長浜市永久寺遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』XII 7 1985年

(3) 小林行雄「土器類」『大和唐古弥生式遺跡研究』（『京都帝国大学部考古学研究報告』第

16冊　1943年

(4) 田中琢「布留式以前」『考古学研究』12-2　1965年　10～17頁で示された土器群が中心をなす型式群をいう。

(5) 佐原真「畿内地方」『弥生式土器集成　本編』　2　1965年

(6) 註(5)に同じ。

(7) 以下「　」を付したものは一型式として設定しうるものではなく，いわゆるという意味を超えるものではない。また「形」とは，搬入品に加え近江産のものを含んでの単に形態だけのものである。

(8) 厳密には南近江系と称した方が現実に即している。その理由については本文中後半にて少し触れている。また「系」については，藤田憲司（「中部瀬戸内地方の非在地形土器」『埋蔵文化財研究会第15回研究集会発表要旨』 1984年）の考えに近い。

(9) これ以前でも小型甕（従来，扁平壺とか鉢の一形式としていたもの）等の口縁ではつまみ出し傾向のみられるものがある。

(10) これ以前でも後期を通じて北陸系の甕は近江各地で見られ，北陸系の初現という意味とは異なる。

(11) この種の甕については，以前若干触れたことがある（用田政晴「唐川遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』 IX-1　1982年）。

(12) 北近江系甕の北陸地方での出土例紹介と考察が行なわれたことがある（吉田秀則「結語」『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書 IX―伊香郡余呉町坂口遺跡―』1984年　16～17頁）。

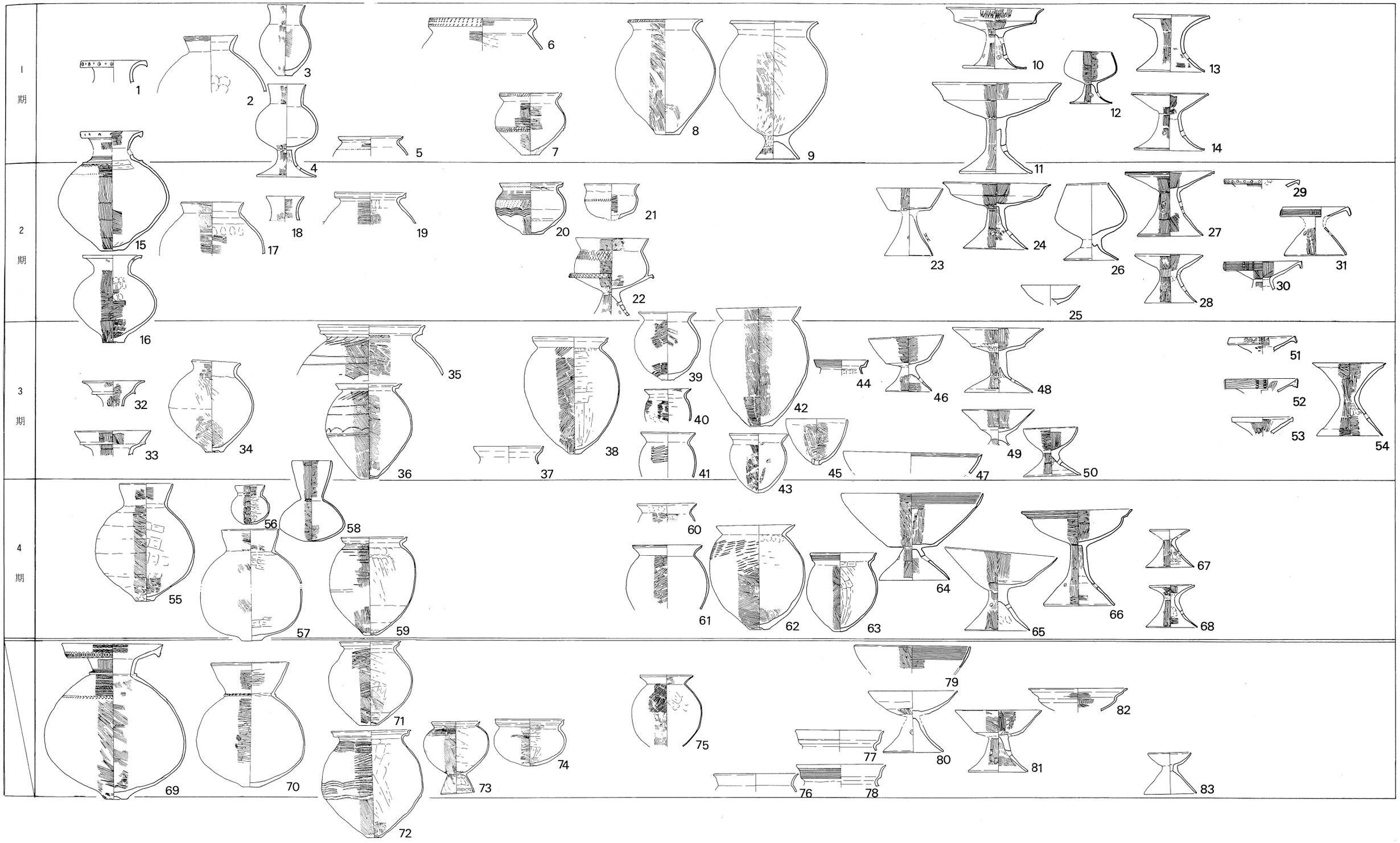
(13) 丸山竜平ほか「草津市片岡遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』 III～II 1976年

(14) 佐原真「先史時代」『彦根市史』第2編上代　1960年　107頁

(15) 中西常雄「大津市北郊地域における画期的状況」『北大津の変貌―弥生時代から古墳時代へ―』　1979年
宮成良佐「湖北地方における初期土師器の一様相」『高田遺跡（長浜電報電話局敷地内所在）調査報告書』1980年など。

第15図出土遺跡

1.3.4.5.6.11.13　南市東遺跡　2.8.9.14　大東遺跡　7.15.17.19.20.24.26.28.30.　榿木原遺跡　21.23.31.52.57.76.77.78.80　唐川遺跡　16.27　大伴遺跡　18.25.29　横江・大門遺跡　22.32.33.39.41.49.50　五之里遺跡　40.44.51　片岡遺跡　10.34.35.36.38.42.43.45.46.70.72.74.81.82　北大津遺跡　37.47　円通寺遺跡　71.73.79　高田遺跡　55.56.60.67　高木遺跡　58.61.63.64.66　正伝寺南遺跡　53.59.62.65.68　下々塚遺跡　75　滋賀里遺跡　12.83　稲部遺跡



第15図　近江における弥生後期後葉を中心とした土器群